

大学生のレポート作成における方略使用と困難感の関連

問題と目的

現在、初年次教育を実施する大学が大半であり、その中核としてレポート・論文作成指導が位置づけられている。しかし、多くの学生がレポート作成に悩みを抱えており、より望ましい支援の設計のため、学生がレポート作成時に直面する悩みの機序を解明することが求められる。本研究では、レポート作成方略使用尺度とレポート作成困難感尺度を作成し、方略使用が困難感の低減に影響するという関連を検討することを目的とした。本研究では、従来の研究が注目してきたいわゆる作文ではなく、大学で求められるレポートに焦点を当て、レポート作成の各作業段階に適した方略を使用することが、作業の進行を円滑にし、困難感の低減に影響すると推測した。

方法

大学生 207 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、個人属性、レポート作成に関する過去の学習経験、従前の研究を参考にして新たに作成したレポート作成方略使用尺度およびレポート作成困難感尺度、レポート作成に対する印象（好き-嫌い、得意-不得意）で構成された。

結果・考察

探索的因子分析の結果、レポート作成方略使用尺度から「推敲・校正」「記述精緻意識」「発想展開」「構成」「形式模倣」の 5 因子が抽出され、レポート作成困難感尺度から「表現上の困難」「評価上の困難」「情報活用上の困難」「構想上の困難」の 4 因子が抽出された。レポート作成に関する学習経験の影響を統制した偏相関分析の結果を Table に示す。当初の想定に反して、「推敲・校正」方略を使用する学生ほどレポート作成に伴う困難を感じるという関連が認められた。これは、困難感が方略の不使用による単なる作業の停滞ではなく、「より良いレポートを書きたい」「正確に仕上げたい」といった学生の意識によって規定されるがゆえに認められた結果かもしれない。そうであれば、レポート作成に伴う困難感は、学生がレポート作成に真剣に取り組み、より高い完成度を目指す場合に生じると考えられる。そのため、困難感の生起は向上心や積極的な学びの意識の表れとして捉えられ、これには学生の成長に寄与する側面もあると言えるだろう。したがって、指導においては、困難感が高まる段階を適切に位置づけ、学びのプロセスの一環として据えることが重要であろう。

Table
レポート作成方略使用尺度とレポート作成困難感尺度の偏相関係数

		レポート作成困難感尺度			
		表現上の困難	評価上の困難	情報活用上の困難	構想上の困難
レポート作成方略使用尺度	推敲・校正	.16 *	.14 *	.12	.23 **
	記述精緻意識	.05	.05	-.00	.16 *
	発想展開	.09	.09	-.01	.07
	構成	.05	-.02	-.06	.07
	形式模倣	-.02	-.01	-.05	-.07

** $p < .01$, * $p < .05$